

OG訪問

歯科医師・土佐愛美さんはニーズの高まりとともに増加している訪問歯科診療の実践者。札幌でまだ実施歯科が少ないころから携わってきた中堅どころです。外来と訪問のバランスはほぼ半々ですが、今回は訪問診療にフォーカスしてご紹介します。

ドゥケア歯科 矯正歯科クリニック(札幌) 副院長
土佐 愛美さん (歯学部歯学科2002年3月卒業)



訪問診療の緊張感

土佐さんが副院長を務めるドゥケア歯科矯正歯科クリニックでは、院長の西山公仁さん(本学歯学部卒業生)はじめ3名の歯科医師全員が外来に加え訪問診療を行っています。土佐さんも2004年の同クリニック就職と同時に訪問診療を始めました。訪問する患者さんの多くは高齢者。当初は認知症の方の対応にとまどうこともあったそうですが、いまは「患者さんの人生のエンディングに携わる大切な分野」と、外来とは違う大きな魅力を感じています。

訪問診療の患者さんは何かしら全身疾患を有するため、学問としても治療としても体から切り離して考えられがちな口腔も体の一部であることを強く意識するといいます。「口腔から全身の状態を知ることができますし、口腔から全身を壊してしまうこともあります。とくに高齢者の場合、間違った歯科治療は生きる力を奪うことになりかねないと、肝に銘じています」。ベッドサイドでより強く感じる緊張感こそ、やりがいを生む原動力のようです。

高齢者施設訪問

取材日の午前、土佐さんは車に歯科治療ユニットを積み歯科衛生士2名と高齢者施設へ向かいました。



「プロ意識の高い歯科衛生士なしでは何もできません」と土佐さん。高齢者施設訪問時は相談員、看護師と情報共有し、介護スタッフの協力も得ます。訪問診療にも息の合ったチームの力が不可欠です。

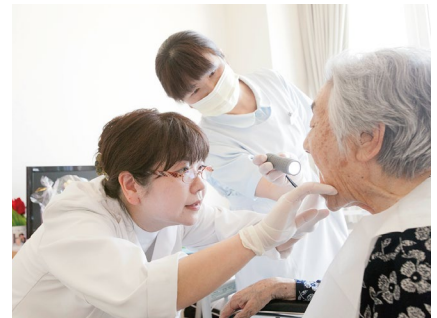


「こんにちは」と華やかな笑顔で居室を訪ねた土佐さんの口調は終始おっとりで、どの患者さんにも緊張する様子は見られません。しかし、おだやかに話しかけ、せかすことなく患者さんの話に耳を傾けながらも、口腔内を診たり義歯調整する手際は実にあざやか。その間にも歯科衛生士に指示を出し、別の患者さんの口腔ケアが同時進行します。患者さんの体調や気持ちの状態を見て、診療を無理強ひせず話をするだけでまさせることも。歯の治療に固執せず「患者さんその人に寄り添いたい」という土佐さんは、食べる・話す喜びをできる限り持続させること、口腔の苦痛や不快を取り除くことの前に、患者さんとの信頼関係、心のふれあいをとても大切にしています。

約10名の診療をし、その後個人宅で診療、一度クリニックに戻り、午後は高齢者施設、個人宅、計4軒を回るというのがこの日のスケジュールでした。

「先生、俺を看取ってね」

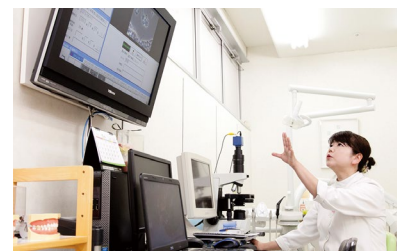
口腔の状態を良好に保てば全身の健康、生活の質が向上する手応えを日々得ている土佐さんですが、就職したてのころは訪問先に向かう車中「こうして運転している間にも同期は現場で実績を積んでいる」と技術面で



診療はベッド、車椅子、患者さんが楽な姿勢で、声がけしながら行います。治療ユニットのほか携帯式レントゲン装置も用意され、訪問先でも外来と同じ治療が可能です。

遅れを取る焦りを感じたことがあったそうです。しかし、外来では得られない経験の価値に気づいたことが自信につながりました。そこには患者さんとの関わりの深さ、難しさの分だけ多くの感動がありました。20代ころ担当した当時80代後半の患者さんは、100歳を超えての大往生まで自宅、入院先、高齢者施設のすべてで土佐さんの訪問診療を希望し「先生、俺を看取ってね」とまでおっしゃったといいます。そしていまも「次はいつ?待ってるよ」と慕ってくれる患者さんがいます。

「卒業してから、精一杯仕事することを毎日続けてきました。もっとできたのにと後悔したくないから。時々、夢の中でも治療しているんですよ」と笑う土佐さん。卒後16年間で得た経験、知識、技術は、この先さらに大きな花を咲かせそうです。



歯周病治療にも力を入れる同クリニックの外来では、患者さんの口腔内の歯周病原菌の有無、細菌の動きをモニターに映し出し、治療の動機付けに役立っています。